

木下通子著

『知りたい気持ちに火をつけろ！－探究学習は学校図書館におまかせ』

綾 牧 子

(文教大学教育研究所客員研究員)

“Fuel your Desire to Learn! – Let’s Go to a School Library for
Inquiry Based Learning Written by Michiko Kinoshita

AYA MAKIKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

本書は、現在、埼玉県立浦和第一女子高等学校の学校司書である木下通子氏の著書である。主として中学・高校生対象の岩波ジュニア新書であるが、学校教育や社会教育、生涯学習に関わる方々にも、学校図書館の利活用を考察するきっかけとなる一冊である。学校図書館の活用方法や司書の仕事、図書館のDX化といった、本書の内容について紹介した。さらに、学校司書と社会教育の場がつながることで、生涯学習社会の構築が期待されることを考察した。

1. はじめに

本書¹⁾は、埼玉県立浦和第一女子高等学校の学校司書である木下通子氏の著書である²⁾。本書の前作として『読みたい心に火をつけろ！－学校図書館大活用術』³⁾があり、その続編的な意味合いも持つ。

本書は、岩波ジュニア新書であり、主として中学・高校生が対象であるが、学校教育や社会教育、生涯学習に関わる方々にとっても学校図書館の利活用を考察するきっかけとなるだろう。そのため、学校の教員はもちろんのこと、社会教育士を持つ方や地域コミュニティに関心のある方にも読み応えのある一冊である。

2. 学校図書館をどう活用するか

あなたは、高校生の時の学校図書館を思い出せるだろうか。評者自身は、試験前に英単語を暗記するために居場所として活用していた、といった思い出しかない。

第1章「学校図書館ってなんだろう」では、

学校図書館の機能について書かれている。たいていの方は、図書館は「本を借りるところ」とだけの認識ではないだろうか。しかし、図書館は「本を借りるところ」だけではない。「読書センター」、「学習センター」、「情報センター」の機能を持ち合わせていることを知ること、その活用方法はもっと広がるに違いない。中学・高校生が本書を読めば、「知りたい気持ち」に火がつくのは必然である。

評者が高校生だったころ（もちろん時代も地域も違うが）、学校図書館がこのような機能を有していたならば、自分の人生が違っていただろうのではないかとさえ感じるのである。授業で関心を持った内容に関連する本、進路に関係のある本、悩んだ時に一息つける本などに出会い、もっと幅広く読書を楽しむことができたはずである。

「なにか困ったことが起こって、自分がそのことについて判断しなくてはならない時に、きっと本が助けてくれます。」(p.24) の一文

が心強い。

第1章では、学校図書館法の一部改正(2014年)や学校図書館ガイドライン(2016年)についても解説されている。司書資格や司書教諭に関心を持っている方にも参考になる内容である。

3. 司書の神髄と教育

学校図書館では、学校司書が本と人とをつなぐために様々な仕事をしている。あなたは、学校司書の仕事について正確に理解しているだろうか。司書にお世話になるのは、もっぱら本を借りる時だけであるとしたら、それはとても失礼なことである。

第2章「探究学習は学校図書館から」、および第3章「授業と連携 学校図書館を活用しよう」では、どのように授業と学校図書館とが連携できるか、豊富な事例とともに述べられている。特に探究学習は学校図書館とのコラボレーションなくしては成り立たないのではないかと。探究したいテーマに関連する図書の探し方、インターネットを活用した情報の探し方、さらには多様なデータベースの種類と活用方法を学ぶ場としても、図書館は欠かせない。研究者が論文を執筆する際の基本ともいえる「情報活用能力」を体験的に身に付けられるのが学校図書館である。そして、そのような空間をデザインし、支えているのが学校司書である。

「大学生になっても、社会人になっても、自分が必要な情報をきちんと収集し、整理・分析できる大人になってほしい。そのきっかけを学校図書館で作ってほしい。」(p.59)の言葉は、司書の仕事の神髄を表しているのではないかと感じる。

学校教育に関わる教職員が司書の仕事について深く理解していれば、生徒の「自己調整

学習・自由進度学習」に対し、適切な支援ができるはずである。また、生徒の自主性を尊重した適切な関わりも持てるはずである。本来、子どもの「知りたい気持ち」を引き出し、火をつけ、一緒に伴走するのが教師の役割ではなかっただろうか。

また、「本の読み方」については、〈理解を深めるための読書〉と〈楽しみのための読書〉の2種類があるという(p.63-64)。私たちは、「本の読み方」を体験的に自然と身に付けてきたように感じるが、2種類の「本の読み方」があることがわかれば、1冊の本を多様な位相で読むことができ、深みのある読書の世界を味わうことができるに違いない。

「読書はスポーツと同じ。とてもアクティブな活動です。」(p.22)

この一文によって読書が「静」から「動」の様相を帯びて見えてくるのである。

このように「本の読み方」を教えてくれるのも、司書の専門性がなせる技であろう。

4. 学校図書館とアクティブラーニング

第3章には、学校図書館のプログラムとして、「点検読書」や「まわしよみ新聞」、「ビブリオバトル」が取り上げられている。これらのプログラムは、教員が学校図書館と連携して豊かな授業展開を工夫するきっかけともなり、参考にできる。「学校司書と教師が連携すると授業が豊かになる」の項にある以下の一文が、そのことを表している。

「司書と教師、そして生徒のみなさんのアイデアをとり入れて、本とみなさんをつなげていきたいです。」(p.105)

本書で紹介されている「まわしよみ新聞」や「ビブリオバトル」は、図書館主体のプロ

グラムである。しかし、それらの実践例は、学校司書との連携によってアクティブラーニングをさらに豊かに変化させられることに気づかせてくれる。

「まわしよみ新聞」と「ビブリオバトル」は、評者も保育者養成校で実践したことがあり、「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」を支え得る有効な学習スタイルであることを実証している。評者がビブリオバトルに出会ったのも、アクティブラーニングの実践研究のプロセスにおいてであった。それは、教員と子どもとが共に主体的に取り組むことのできる授業展開を創造するものである。

本書で紹介されている数々の実践例は、アクティブラーニング的な授業展開を構想していく上で、どの学校種・どの教科目でも参考となり得る。

5. コロナ禍の影響

コロナ禍で社会は急激なDX化を迫られた。

第4章「コロナ禍で進んだ学校図書館のDX化」を一読すれば、コロナ禍で生徒の登校が制限された状況における学校図書館の取り組みがリアル感を伴って理解できる。「できることからやっていく」という著者の意気込み、そして生徒や先生方への本の貸出やレファレンスサービスを多様な手段で途切れさせない工夫が満載である。

もともと図書館は、パソコンでの蔵書管理やデータ検索など、ICT活用との親和性が高い。しかし、社会全体が必要に迫られて急速にDX化する中で、「学校のDX化に合わせて、学校図書館も変わっていかなくてはなりません」(p.147)という。著者は、必要に応じて生徒や先生方にアンケートを取ったり、Google for Educationについて学んだりしながら、コロナ禍前以上に学校図書館を利用しやすい形にしているのである。

また、電子書籍についても言及されており、

その導入の経緯や利用増の工夫などを細やかに知ることができる。利用者の需要をしっかりとリサーチし、利用目的を明確にしながら着実に利用者のもとに「新しい学び」を届け、支えていく取り組みは、ひとつのプロジェクトを進めていくモデルとしても参考になるだろう。

学校の教職員のみならず、書店や図書館関係者、あるいは保護者の方にも一読していただきたい章である。おそらく、学校図書館とのつながりをどこかで感じることができるのではないだろうか。

6. 学校司書×社会教育士＝生涯学習

著者は、2021年～2022年にかけて社会教育主事講習を受講し、社会教育士としても活躍している。そのため、本書の最大の特徴は、**第5章「学校図書館を地域に広げる 学校司書×社会教育士」**にあるといえる。著者の社会教育主事講習での学びについても言及されており、「司書×社会教育士」が形作られていくプロセスも興味深い。

学校図書館が地域にどのように出ていくことができるのか、そして、人と本をつなぐ活動を地域でどのように展開できるのか、著者の試行錯誤しながらの活動が、実に多様に紹介されている。高校の探究活動のデザインを作っていく過程において、地域で活動している方々との出会いが、著者がまちづくりに興味を持ったきっかけとのこと。地域や公民館でのビブリオバトルも実践されている。

考えてみれば、地域コミュニティの中に「本」はいくらでも存在する。本書で紹介されている「まちライブラリー」や「シェア本棚」、「子ども食堂や子どもの居場所」、「ブックスタート事業」などは、地域と密接な関わりを持っており、まちづくりや社会課題の解決といった要素も含みこんでいる。

特に注目したいのは「シェア本棚」である。

本書で紹介されている大宮の「ハムハウス」(現在は「本と喫茶 夢中飛行」)は、誰でも本棚オーナーになることができ、自分の「本」を本棚に並べることによって、「人」とのつながりが自然と生まれる空間として注目される。著者は「本と喫茶 夢中飛行」の本棚オーナーでもあり、自身のYouTubeチャンネル「みちねこラジオ」で紹介した本を並べている。

このように、地域の場合でも「本」をツールとした多様な方法で「人」と「人」とのつながりを生み出すことができることを本書は教えてくれる。「本」が存在する場所を学校図書館に限定せず、幅広く外へ向けていくことで、「本」はどのような人の学びもそっと支える。社会教育が、私たちの身近なところに存在することの証である。

著者は、本書の最後に「学び続ける大切さー生涯学習へのアプローチ」との項目を立て、次のように問いかけている。

『『生涯学習』というと、ずっと勉強するの？ と嫌な気持ちになる人もいるかもしれません』(p.191)

そう感じる人は、意外と多いのではないだろうか。かつて評者もそう感じていた時期がある。しかし、文は以下のように続く。

「自分が興味を持っていることについて、深く掘り下げていくことも生涯学習です。」(p.191)

自分の興味を持ったことについて深掘りしていく力は、人生を危機から救い、あるいは生涯にわたって自律的な学習を進めていく原動力となるのである。そして、次の言葉が続いていく。

「その第一歩は学校図書館の活用です。」(p.192)

上記の一文からは、学校図書館の持っている力とそれを動かす学校司書が、生涯学習社会の重要な要素として機動してほしいとの期待が生じるのである。

7. おわりに

実は、評者はコロナ禍で外出が制限されていたころ、通信教育で学校図書館司書教諭と図書館司書の資格を取得したが、そのとき初めて司書の仕事の奥深さと幅広さを知った。そこで得た知識が、本書で解説されている図書館の機能や司書の仕事を理解するのに役立ったのである。

もっと前からレファレンスサービスといった図書館の様々な機能、および司書の仕事の理念と多様な役割について知っていたならば、図書館の活用の仕方は違っていたであろう。本書のように岩波ジュニア新書として中高生をはじめ多くの方々に読まれれば、司書の仕事について幅広く周知する機会にもなると信じている。

全国の学校図書館が、子どもたち1人ひとりの「自己調整学習・自由進度学習」を支え、生涯学習社会の担い手となるための基礎を培う場となることを願うとき、学校司書の役割の偉大さはよりクローズアップされる。その点において、著者の学校司書としての仕事にリスペクトを感じずにはいられない。だからこそ、本書の「あとがき」でも述べられているように、「埼玉県の高校図書館のように、一校に一人、専門職の司書がいるというのは稀有」(p.199)である学校司書の働く現状が、改善されることも願うばかりである。

生涯教育・生涯学習は、学校教育や社会教育という枠を超えて、1人ひとりの自律した

生の充実を支援する視点で考えられてこそ、生涯学習社会の構築に貢献できるものと評者は考えている。本書が、その初動として一翼を担うことを期待するものである。

最後に、評者自身もシェア本棚「本と喫茶 夢中飛行」の本棚オーナーをしており、木下氏との出会いも、この場においてである。「人と人をつなぐツール」としての「本」が持つ可能性の証であり、この場を借りて「本と喫茶 夢中飛行」の存在に感謝申し上げたい。

【引用文献・注】

- 1) 木下通子『知りたい気持ちに火をつけろ！－探究学習は学校図書館におまかせ』岩波書店、2023年
- 2) 所属は2024年9月現在
- 3) 木下通子『読みたい心に火をつけろ！－学校図書館大活用術』岩波書店、2017年

【参考 Web サイト】

- ・みちねこサイト

<https://sites.google.com/view/michineko/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>
(2024年9月7日取得)

- ・本と喫茶 夢中飛行－みんなの「夢」がひろがる場所

<https://muchu-hiko.com/>
(2024年9月7日取得)



岩波ジュニア新書

本書書影

